

川を渡った巡礼者たち イーシャ・サーデサイによる再話

男が川のほとりに立ち、青灰色の水を心もとない様子でのぞき込んでいました。彼は数歩離れた所にある数そうのおんぼろの小舟に目をやりました。背後から息をのむ音が聞こえ、仲間が追い付いたことを告げました。そして 10 人全員が川岸に集まり、目の前に広がる水面を見詰めました。

川幅は広く、でも対岸の細長い陸地が見えないほどではありませんでした。男——一行のリーダー的存在——は、ポケットから真ちゅうの方位磁石と、四角く折り畳まれていた古びた地図を取り出しました。地図を広げ、眉間にしわを寄せ、そしてまたポケットにしまい込みました。「そうだな」と、彼は言いました。「私たちはこの川を渡って向こう岸に行かなければ。そして歩き続けるんだ」

彼らはインドの巡礼の途にあり、多くの聖地や美しい場所を訪れていました。この旅の大半は徒歩で行っていましたが、時折——今回のように小舟など——他の交通手段を使わなければならないこともありました。

「さあ、さあ、あの小舟を使おう」と、男は言い、小舟に向かいながら一行に後に続くよう身振りで促しました。間もなく、全員がそれぞれの小舟に乗り込み、川にこぎ出しました。

横断は困難を極めました。水面は所々で波打ち、そして誰もが小舟を操ったりこいだりすることに熟練しているわけではありませんでした。危うい場面も何度かありました。小舟にしぶきが入ることも少なからずありました。そして、最初は互いに比較的近い場所にいたのに、小舟はすぐに離れ離れになってしまい、結局はそれぞれが、別々の時間に、別々の場所で、対岸にたどり着きました。

何とか対岸に着きましたが、一行は川岸に散り散りになっていました。彼らは小舟から転げ出て、疲れて息も絶え絶えになり、ぬれた衣服は体にへばり付いていました。互いの姿を確認すると、ゆっくりと再び集まりました。

再び全員がそろそろ、一行のリーダーは、全員が渡り切ったことを確認するために、人数を数えようと提案しました。彼は、一番近くにいた男性を指さして言いました。「1」

彼はその男性の隣に立っている女性を見ました。「2」。次にその隣の女性です。「3」

このようにして、彼は一行の最後に近づくまで数え続けました。「7、8、9...」

彼は立ち止まりました。一行の皆は、目をしばたたかせて彼を見返しました。

「9？」と、彼は繰り返し、困惑の表情が彼の顔をよぎりました。「しかし向こう岸から出発したのは10人だった。どうして9人しかいないんだ？」

まるで一行の10人目が砂の中からひょっこり顔を出すのを期待するかのように、他のメンバーは人けのない川岸をさっと見回し始めました。

そして、誰かがおずおずと言いました。「だ、誰か川でいなくなっていたらどうしよう？」

「静かに」と、メンバーのもう一人、髪の毛を短く刈り上げた女性が言いました。「きっと何かの間違いよ。さあ、数えてみましょう。1。2。3。4。5。6。7...8...9人？」

数え終わると、彼女は口ごもりました。「こんなことってある？」と、彼女は困惑して言いました。

そのようにして、彼らは全員で、一行に何人いるかを数えて回りました。何度も繰り返しましたが、彼らは9人しか数えられませんでした。数えるたびに失敗し、さらなるパニックに陥り、絶望を深めていきました。

そうこうするうちに、もう1艘の小舟が滑らかに岸に着きました。巡礼者たちは自分たちの窮地で頭がいっぱいで、それに気づきませんでした。若い女性が小舟から身軽に降りたのも、その後抱き上げた小さな男の子も見えていませんでした。

女性と子どもは自分たちの場所を確認し終わると、目の前の光景にじっと目をやりました。そこには狂ったように互いを指さし、取り乱したような声で1から9まで何度も数えている人々のグループがいました。

男の子は不思議そうに母親を見上げました。「ママ、あの人たち何をやってるの？」

「よく分からない」と、女性はゆっくりと言いました。「行ってみて、助けが必要かどうか聞いてみようか？」

男の子はうなずきました。母親は彼の手を取って、一行に近づきました。

「失礼します」と、若い女性は丁寧に言いました。「何か問題でも？」

一行のリーダーが彼女の方を向きました。彼の顔には、不安のあまりにつかんだ痕が赤く残っていました。

「はい、それが」と、彼は若い女性に言いました。「あなたが助けてくださろうとしているのはありがたいのですが、私はこの私たちのグループがとても悪い知らせと闘っているのではないかと

恐れています。この巡礼に出発したのは 10 人でして——それなのに、まあ、ご覧の通り...」。男は言い終えることができないまま、力なく他の者たちを示しました。

すると、男の子が口を開きました。「ぼくがやってみるよ！」と、彼は言いました。「ぼくに数えさせて。ぼくは 10 まで数えられるよ！」

男は明らかに納得していませんでしたが、男の子の熱意をむげにすることはしたくないようでした。彼は頭をちょっと下げて同意を示しました。

男の子は目を輝かせ、数え始めました。「1...2...3...」。彼は注意深く、慎重に、集中した口調で、目を一人から次の人へと動かしながら数字を一つ一つ言いました。

「8...9...10！」彼は興奮して言い終わりました。

一行の皆が、驚いて彼を見詰め返しました。

「どうしてこんなことになるんだ？」リーダーは男の子の母親に向いて言いました。「私たちはそれぞれ 9 人しか数えていないのに、この子はどうして 10 人数えられたんでしょう？」

ほほ笑んでから、母親は優しく言いました。「失礼ながら、皆さん一人一人が、自分を勘定に入れていなかったのだと思います」

これはインド哲学のヴェーダーンタの文献の中で語られている古典物語に発想を得たものです。

